

日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップについての考察

—断り表現を中心に—

加 納 陸 人 ・ 梅 曉 蓮

A Study of the Communication Gap in Japanese and Chinese Languages : Expressions of Rejection

Michihito Kano · Mei Shaolian

本稿以拒绝的语言表达方式为中心，对中日两国的语言交流方式的差异进行了考察。本次通过对日本的已走上社会参加工作的人、大学生、非学习日语的中国人、学习日语的中国人进行问卷调查，就拒绝的语言表达方式的异同进行了分析研究。以往的研究认为中国人是直接地表达自己的意志，这次的调查结果却有所不同。此次调查显示中国人的拒绝方式也存在像日本人一样的委婉的表达方式。无论是中国人还是日本人，其思考方式、价值观都不是固定不变的，而是随着时代的变化在变化，语言也在变化。另外，不仅要注意到中日两种语言的不同之处，也要注意两种语言的相通之处。今后，在日语教育上，通过对语言的交际功能的重视，中日两国交际方式的差异有可能逐渐缩小，可望实现顺利的交流。

【キーワード】 断り表現、コミュニケーション・ギャップ、
詫び先行型、理由先行型、結論先行型、
直接的な断り、親しい目上、親しくない目上、
親しい同輩、親しくない同輩

1. はじめに

異文化間における円滑なコミュニケーションを行うには、まず音声面や文法という統語面のことが挙げられるが、発話・文法上の誤りは、比較的気づきやすく、注目しやすい。しかし異文化間コミュニケーション全体の問題は、音声面や文法知識といった狭い意味の言語能力に限らない。流暢な日本語を話す日本語学習者でさえ、コミュニケーションをはかる際に、自文化の持つ価値観などの意味体系で行動し、コミュニケーションに微妙なずれが生じ、発話行為上の誤りを犯してしまうことがある。発話行為上の誤りは、相手国の目に見えない文化固有の価値、信念、態度、思考様式、行動規範、コミュニケーション・スタイルなどが分からないと犯しても表面にはっきりと誤りとして現れないため、気づきにくいのである。

本稿は日中両国語におけるコミュニケーション・ギャップという問題意識を見据えて、断り表現を中心に考察する。

2. 先行研究

断り表現についての先行研究は多くなってきた。これは日本語教育の中で、文法知識だけでなく、実際のコミュニケーション能力の養成を重視してきた証とも言えよう。

まず、断り表現についての先行研究の中で、その一部を概観する。主に森山(1990)、生駒・志村(1993)、熊井(1992)、馬場・禹(1994)、劉・小野(1998)の研究である。

森山(1990)は、日本人の断り方略を次のように整理している。

① 相手が親しい：男性はより率直表示（嫌型）が多い。

相手が上：関係置換の方略（嘘型）

相手が下・同等：率直表示（嫌型）

② 相手が親しくない：男は嫌型、女は嘘型が多い。

相手が上：関係置換の方略（嘘型）か、率直表示（嫌型）

生駒・志村(1993)は、「断り」という発話行為をアメリカ人日本語学習者が日本語で行い、日本語へのプラグマティック・トランスファーが存在することを明らかにしている。

熊井(1992)は、外国人に見られる待遇行動の特徴と問題点を明らかにするため、外国人が日本において「失礼にならないため」の待遇行動とどのようなものかという視点から、「断り行動」を中心にして調査分析した。その中で、「断り表現」のちょっとした失敗が対人関係において深刻な摩擦につながる危険性や談話構造全体を視野に入れた指導の必要性について述べている。

馬場・禹(1994)は、「断り」の依頼内容（当然と当然でない、事項負担の軽重）および断る相手との上下・親疎によって断り方略の違いを考察した。

カノックワン・ラオハブナキット(1995)は、日本語教科書における「断り」の扱いと、電話での会話を録音したデータによる実際の日本語の「断り表現」や日本人の「断り方」を比較した。とくに実際の会話では「状況の必要性」の度合いに応じた断り方、また日本語教科書でほとんど扱われていない、「時間的・能力的に可能」だが、断るという場合の「断り」ストラテジーに焦点をあて考察し、その結果は教科書の開発に利用できると指摘した。

藤森(1995)は、「断り」行為を構成する「弁明」意味公式の節末および文末に見られる表示マーカの使用について、日本語母語話者と日本語学習者とを比較をした。

志村(1995)は、日本語の「断り」の中で多用される待遇表現としての省略—中途終了文を日本語母語話者と英語の母語話者と比較して、カリ

キュラム・教材の中にコミュニケーション能力を養成する重要な語用論的側面が、今の教科書の中に足りないため、これからの教科書の中に導入され、教授されるべきものであると指摘した。

劉・小野(1998)は、日中の母語話者それぞれに特徴的な断り表現を取り上げ、日本語母語話者の断り表現を中国母語話者はどのように受け止めているか、また、中国語母語話者の断り表現に対して日本語母語話者はどのような反応を示すかを異文化間コミュニケーションの視点から論じた。

先行研究は断り表現について様々な視点から考察している。本稿もこれらの研究をふまえて、生駒・志村(1993)の意味公式に基づき、日中両国語における断り表現の異同、中国人日本語学習者の断り表現と日本語母語話者との差異、また先行研究との比較についても触れたい。さらに、前述のことと関連させ、アンケート調査を通して、今日の日本語教育の中で、コミュニケーション能力養成を目的とした日本人の思考パターンと行動様式などについても考察したい。

3. アンケート調査

3.1 調査対象

本稿の調査は中国と日本でそれぞれ行った。調査者対象者は、中国側では中国人非日本語学習者(湖南省湘潭市の社会人37名、湘潭大学の非日本語学習教師8名と英語科の学生27名)、中国人日本語学習者(湘潭大学の日本語教師8名、日本語科学生2年生7名と4年生20名)の調査は、友人や湘潭大学の教員にお願いした。日本側は日本語母語話者社会人50名の調査を日本人の友人にお願いし、さらに文教大学の日本人学生208名に調査を行なった。

3.2 調査時期

2002年4月～5月に行った。

3.3 調査内容

以下の場面を設定した。

「来週の土曜日、ビデオカメラをちょっと貸していただきたいんですが…」と目上または同輩に依頼された場合、親しい場合と親しくない場合、それぞれどのように断るか。

3.4 調査方法

上記に設定された場面で、調査対象者が実際にどのように断るかを記述式で答える方法で行なった。中国人非日本語学習者には中国語で、日本語学習者には日本語で日本人（社会人と大学生）には日本語で回答してもらった。

調査の結果は生駒・志村等の「意味公式」の分類を参考にさせてもらい、以下の「断り」表現の分類に基づいて少し変形したもので分析を行う（ただし、調査結果に現れたものだけを示す）。

① 直接的な断り

A 遂行動詞を使う断り方

例：「貸せないです。」

B 遂行動詞を使わない断り方

例：「ちょっと無理です。」

② 間接的な断り

A 詫び（謝罪）や残念な気持ち

例：申し訳ありません、残念です）など

B 理由（弁明）

例：「来週の土曜日、私も使うので…」

C 代案提示

例：「ほかの日でしたら、お貸しできますが…」 「他の人にあたってみてください。」

D 願望

例：「ほんとでしたら、ご協力したいんですが。」 「ぜひお貸したいんですが。」

E 今度の約束

例：「でも、また必要なときがあったら、おっしゃってくださいね。」

F 回避

a (依頼の一部の) 繰り返し 例：「土曜日ですか」

b 冗談 例：「おめー(おまえの意味—著者)になんか貸したくないね。」と冗談を言う

c 言葉を濁す 例：「それは困りました。」

4で調査結果の考察を行うが、依頼場面に上記の分類項目を「詫び先行型」や「理由先行型」などにまとめて、その出現の頻度を一覧表にした。なお、表中「詫び先行型」は、例えば「詫び+理由」という意味公式の組み合わせは、発話行為の最初に現れる意味公式が「詫び」であるので、「詫び先行型」と呼ぶことにした。「詫び先行型」には「詫び+理由」「詫び+理由+提案提示」「詫び+不可」などがある。「+」は組み合わせた形で現れたものを示している。

4. 調査結果と考察

4.1 断り表現のパターンの出現頻度

中国人非日本語学習者、中国人日本語学習者と日本人の意味公式を用いた断り表現パターンの出現頻度の調査結果を表1にまとめた。

表 1

断る人	中国人非日本語話者 72				中国人日本語学習者 35				日本人 258			
	目上		同輩		目上		同輩		目上		同輩	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
詫び先行型	23 31.9	26 36.1	16 22.2	27 37.5	24 68.6	24 68.6	16 45.7	21 66.0	164 63.6	137 53.1	179 69.3	176 68.2
理由先行型	29 40.3	32 44.4	29 40.3	29 40.3	6 17.1	7 20.0	8 22.8	8 22.8	51 19.8	55 21.3	40 15.5	48 18.6
結論先行型	0	6 8.3	7 9.7	11 15.3	1 2.9	3 8.6	6 17.1	2 5.7	16 6.2	11 4.2	22 8.5	19 5.3
直接的な断り	0	8 11.1	7 9.7	14 19.4	5 14.2	7 20.0	8 22.8	2 5.7	124 48.1	131 50.8	142 55.0	136 52.7

「詫び先行型」は「詫び+理由」「詫び+理由+代案」「詫び+理由+詫び」「詫び+理由+不可」「詫び+理由+今度の約束」「詫び+不可」「詫び」などを含めている。

「理由先行型」は「理由+詫び」「理由+代案」「理由+詫び+不可」「理由+不可+詫び」「理由+不可」「理由」などがある。

「結論先行型」は「不可+理由」「不可+詫び」「不可+代案」「不可+理由+代案」「不可+詫び+今度の約束」「不可」などがある。

「直接的な断り」とは、結論先行型を含めた不可（例えば「無理です」など）の表現が現れたものを指す。

次はアンケート調査の結果を具体的に分析していきたい。

4.1.1 親しい目上の場合

表 1 から分かるように、中国人非日本語学習者は「詫び先行型」は 31.9%、「理由先行型」は 40.3% である。「理由先行型」が「詫び先行型」を上回っている。日本人のほうは、「詫び先行型」は 63.6% で、調査対象者の半数を超えたのに対し、「理由先行型」は 20% にも満たない。日本人と比べると中国人はまず理由を言う傾向が見られるが、日本人はまず「詫び」をするというタイプが多い。

この違いから、中国人はまず自分の事情を説明することによって、相

手に自分の立場に立って理解してもらおうという思考様式が窺えるのに対し、日本人はまず相手の意向に添えない、相手に対する「申し訳ない」気持ちをまず伝えるという配慮が多く見られる。ただし、中国人非日本語学習者の中でも3割強の人がこのような配慮が見られたことは無視できない。

「結論先行型」は今度のアンケート調査の中で、中国人非日本語学習者は1人もいなかった。日本人は「結論先行型」が16人で、6.2%を占めている。さらに「不可」という直接的な断りが文中に現れている人が124人で、48.1%を占めている。これまで中国人は結論先行型を使いやすいとよく言われていたが、今度の調査は親しい目上には「結論先行型」が見られない。「結論先行型」は親しい目上に使わない傾向がある。つまり、親しい目上に対して中国人は、相当な気配りをしている傾向があるということが分かる。

中国人日本語学習者は「詫び先行型」が68.6%、日本人の63.6%を超えており、日本人と同じように、配慮があるということが分かる。「理由先行型」は17.1%で、日本人の19.8%に近い。また、「結論先行型」は1人いた。直接的な断りも20%を占めており、日本人の48.1%より30ポイント近く低い。

4.1.2 親しくない目上の場合

中国人非日本語学習者は「詫び先行型」が36.1%、「理由先行型」が44.4%と、親しい目上と比べ、やや多い。日本人は「詫び先行型」が53.1%で、親しい目上の場合の63.6%よりやや少なく、「理由先行型」は21.3%で、親しい目上の場合の19.8%よりやや多い。これは日本人が親しくない目上の人に対して、相手の意向に添えない「申し分けない」気持ちをまず伝えるという配慮が、親しい目上より減少している傾向が見られる。

「結論先行型」は中国人非日本語学習者が8.3%で、「直接的な断り」は

11.1%、親しい目上の場合より多いが、日本人のほうは4.2%で、少ない。ただし、「直接的な断り」の出現が50.8%でやや多い。ここから中国人は親しい目上と比べると、親しくない目上に対して、はっきり自分の意志を伝える傾向が見られる。人間関係はまず親疎関係、それから上下関係を重視する傾向があるが、日本人は親より疎のほうに対しての言葉遣いに気を配っている傾向がある。しかし、その反面自分の意志をはっきり伝える傾向がある。

中国人日本語学習者は「詫び先行型」が68.6%、親しい目上の場合と変わらないが、「理由先行型」は20.0%で、やや多い。「結論先行型」は8.6%で、直接的な断りは22.8%で、親しい目上の場合より多い。「結論先行型」は日本人の4.2%より多い。この数字を見ると、中国人日本語学習者には親しくない目上の人にも、もう少し心配りが必要になってくる。

4.1.3 親しい同輩

中国人非日本語学習者は「詫び先行型」が22.2%、「理由先行型」が40.3%で、「理由先行型」のほうが多いのに対し、日本人は「詫び先行型」が69.3%、「理由先行型」が15.5%で、「詫び先行型」のほうが50ポイント以上高い。

「結論先行型」は、中国人非日本語学習者は9.7%で、日本人の8.5%より少し多いが、「直接的な断り」は、中国人非日本語学習者は9.7%で、日本人の55.0%より45ポイントも少ない数字を示している。

中国人日本語学習者は「詫び先行型」が45.7%で、目上（親疎とも）より少ない傾向にあるが、「理由先行型」は22.8%である。この数字と日本人の69.3%と15.5%とを比べると差が見られる。日本人は親しい同輩にも「詫び先行型」が多い。

「結論先行型」においては、中国人日本語学習者は17.1%で、日本人の

8.5%より倍多く、日本人より親しい友達に気軽に断る傾向が見られる。

「直接的な断り」は、中国人日本語学習者は22.8%であるのに対し、日本人は55.0%で、32ポイント以上高く、日本人のほうが親しい同輩に断る意向をはっきり伝える傾向が見られる。

4.1.4 親しくない同輩

中国人非日本語学習者は「詫び先行型」が37.5%で、親しい場合より多い。また、日本人の68.2%と比べると、30ポイント以上低い。「理由先行型」は40.3%で、日本人の18.6%と比べると、21ポイント以上高く、どちらも差が顕著に現れている。

「結論先行型」は、中国人非日本語学習者は15.3%で、日本人の5.3%より3倍近く高い。日本人の目から見ると、中国人は親しくない同輩への気配りが足りず、冷たく映るのではないだろうか。そして、「直接的な断り」は19.4%で、日本人の52.7%より33ポイント以上低い。日本人は、親しくない同輩にははっきり自分の意志を伝える傾向が出ている。また、中国人日本語学習者は5.7%で、日本人との差はあまりない。

総合的に見ると、中国人非日本語学習者は「詫び先行型」より「理由先行型」のほうが現れやすい。目上か同輩か関係なく、親より疎に対して「詫び先行型」が多い。親しい目上には「結論先行型」と「直接的な断り」が見られないのは、かなり気配りをしていると言える。同輩の場合は、親より疎に「結論先行型」「直接的な断り」が用いられやすい。親しくない同輩への配慮は日本人より足りない。ただし、全体的に見れば「結論先行型」と「直接的な断り」が少ない。

日本人は目上、同輩、親疎に関係なく、「詫び先行型」が現れやすい。疎の場合、目上より同輩に「詫び先行型」が多い。「結論先行型」は少ないが、「直接的な断り」は半数か、半数を超えている。本調査では、日本人の半分ぐらいがはっきり断る（相手に自分の意向を伝える）傾向が見

られた。

中国人日本語学習者においては、「詫び先行型」が日本人と同じく多く用いられることが分かった。ただし、親しい同輩の場合、日本人より少ない。「結論先行型」は、日本人は親しい目上の場合、6.2%なのに対し、中国人日本語学習者は2.9%なので、伝統的な日本語社会から見て、失礼になる心配はそれほどでもないが、親しくない目上には逆に2倍くらい高く、配慮が必要になってくる。

4.2 日本人社会人と日本人大学生の断り表現パターンの出現頻度

日本人社会人と日本人大学生の断り表現パターンの出現頻度において、違いが現れたので触れてみたい。その違いを表2に示した。

表 2

断る人 依頼者	日本人社会人 52				日本人大学生 208			
	目上		同輩		目上		同輩	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
詫び先行型	30 70.0	19 38.0	20 40.0	26 52.0	134 64.4	118 56.7	159 76.4	152 73.1
理由先行型	14 28.0	17 34.0	14 28.0	13 26.0	37 17.8	37 17.8	26 12.5	35 16.8
結論先行型	1 2.0	2 4.0	4 8.0	5 10.0	15 7.2	9 4.3	18 8.6	14 6.7
直接的な断り	16 32.0	20 40.0	19 38.0	21 42.0	109 52.4	111 53.4	123 59.1	115 55.3

4.2.1 詫び先行型

親しい目上の場合、日本人の社会人も日本人大学生もあまり変わらないが、親しくない目上の場合、大学生は56.7%で、社会人の38%より20ポイント近く高い。

親しい同輩の場合、日本人大学生は「詫び先行型」が76.4%で、日本人社会人の40%より36ポイント以上高い。また、親しくない同輩の場合も73.1%あり、社会人の52%より21ポイントも高い数字である。

4.2.2 理由先行型

全体的に日本人社会人のほうが日本人大学生より12ポイント以上高い。

4.2.3 結論先行型

ほぼ同じであるが、ただ、目上に対して日本人大学生は「結論先行型」が7.2%で、社会人の2%より多い。これはアンケート調査の「先輩、すみません…」という学生の答えから一部分の学生は「目上」という概念は先生や上司ではなく、先輩を想像しており、そのことにより「結論先行型」が多くなったと推測できる。

「直接的な断り」が稀であると言われている先行研究と比べると、今回の調査は違った結果が出ている。日本人社会人の中で「直接的な断り」をしているのは30%を超えており、さらに日本人大学生のほうが多く、50%を超えている。本調査では、日本人は相手にはっきり自分の意向を伝える傾向が窺える。

4.3 代案提示についての日本人大学生と中国人日本語学習者との比較

「願望」「今度の約束」の使用は、日中両国とも多くない。その中でも中国人非日本語学習者に少し多く見られたが、ここでは触れない。

代案提示の出現頻度が表3に示されている。

表3

断る人	中国人非日本語学習者 72				中国人日本語学習者 35				日本人 258			
	目上		同輩		目上		同輩		目上		同輩	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
代案提示	12 16.7	4 5.5	11 15.3	0 0	5 14.3	3 8.6	2 5.7	0 0	19 7.3	15 5.8	21 8.1	13 5.0

「代案提示」については全体的に少なく、中国人非日本語学習者においては、親しい場合のほうが親しくない場合より代案提示が多い。親しい目上の場合16.7%、親しくない目上の場合5.5%である。とくに注目には値するのは親しい同輩の場合15.3%で、親しくない同輩の場合は1人もいないことである。これらの数字を代案提示という視点から見ると、中国人は上下関係より親疎関係を重視する傾向が強いと言える。

日本人は親しい目上の場合、代案提示は7.3%で、親しくない目上の場

合は5.8%ある。親しい同輩は8.1%、親しくない同輩5%で、それほど大きな違いは見られない。中国人非日本語学習者は日本人と比べると、差が見られたが、中国人日本語学習者の場合はどうであろうか。次に中国人日本語学習者と日本人大学生の場合について、考察してみたい。

表 4

断る人	中国人日本語学習者 35				日本人大学生 208			
	目上		同輩		目上		同輩	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
代案提示	5	3	2	0	14	11	18	9
	14.3	8.6	5.7	0	6.7	5.3	8.6	4.3

中国人日本語学習者は親しい同輩より親しい目上に代案提示が多いのに対して、日本人大学生は親しい目上と親しい同輩とそれほどの差がないが、親しい同輩のほうが若干多い。また親しくない同輩の場合、日本人大学生は4.3%あるが、中国人日本語学習者は1人もいない。また、代案提示の内容からも次のような差が見られた。

4.3.1 親しい目上の場合

中国人日本語学習者は代案提示が14.3%である。その提示内容は以下である。

- ① 「ほかの日はいかがでしょうか。」
- ② 「日曜日はどうですか。」
- ③ 「日曜日ならいいですか (いかがですか)。」

などと目上に対して、丁寧で積極的な提案をしている。

日本人大学生は代案提示が6.7%で、中国人日本語学習者より8ポイント近く低く、提示内容は以下である。

- ① 「ほかの日でもいいですか。」
- ② 「ほかの日ではだめですか。」
- ③ 「ほかの日にでしたら、貸し出せますけど。」
- ④ 「日曜日だったら、貸せますよ。」

- ⑤ 「ほかの日でしたらお貸しできますが。」
- ⑥ 「それ以外の日だったら、いつでもお貸ししますのです。」
- ⑦ 「ふだんは使わないのですが。」
- ⑧ 「〇〇さんも持っていると思いますよ。」

このように丁寧で積極的な提案のほか、次のような提案もある。

- ① 「ほかに誰か貸せそうな人、探しましょうか。」
- ② 「ほかの人にあってみてください。」
- ③ 「ほかの人に借りたほうが良いと思う。」
- ④ 「ほかの人にあってみましょうか。」
- ⑤ 「買っちゃえば？」

などがある。日本人大学生は代案提示の表現が複雑で多様である。ただし、「ほかの人にあってみてください」のように代案提示が責任回避するきらいがある。

中国人日本語学習者は代案提示が単純で、表現が豊かではない。親しい目上に対しては「ほかの人にあってみてください」のような責任回避のニュアンスを持つ代案は見られない。

4.3.2 親しくない目上の場合

中国人日本語学習者は親しくない目上の場合、代案提示が8.6%である。その内容は「来週どうですか (いかがですか)」などである。日本人大学生は5.3%で、提示内容は以下である。

- ① 「ほかの日にしていただけませんか。」
- ② 「別の日でもよろしいでしょうか。」
- ③ 「ほかの日でよろしければ、お貸しできますが。」
- ④ 「〇〇さんも持っていると思います。」

このような積極的な代案のほかに、以下のあまり積極的でない提案が見られる。

- ① 「ほかの人に聞いてください。」
- ② 「ほかの人に借りたほうがいいと思う。」
- ③ 「ほかをあたっていただけますか。」

親しい目上の場合と比べると、積極的でない代案がやや多い。

4.3.3 親しい同輩の場合

中国人日本語学習者の代案提示は5.7%で、親しい目上の場合より倍以上少ない。その内容は「ほかの人に聞いてください」などである。

日本人大学生は代案提示が8.6%で、親しい目上の6.7%より若干高い。その提示内容は以下である。

- ① 「ほかの日なら、いいよ。」
- ② 「別の日でもいいかな。」
- ③ 「ほかの日だったら、いいんだけど。」
- ④ 「ほかの日になら、いつでもいいんだけど。」
- ⑤ 「ちがう日だったら、平気だけど。」
- ⑥ 「たしか、〇〇さんが持ってたから、聞いてみるわ。」
- ⑦ 「誰からも借りられなかったらもう一度言って。」
- ⑧ 「誰かほかにはいない？わたしも探してみるよ。」

そのほかにも次のような提示が見られた。

- ① 「ほかの人に借りて！」
- ② 「ほかの人に頼んでみて。」
- ③ 「もっと良いやつ持ってる人に頼んで。」
- ④ 「誰かほかの人に借りて。」
- ⑤ 「自分で買えよ。」

かなりドライな感じのものもあるが、積極的に協力したい気持ちと突放す気持が言葉の中に潜んでいる。とくに普通体やくだけた表現は、中国人日本語学習者にとって、なかなか使えない表現で、このようなニュ

アンスが表出していない。

4.3.4 親しくない同輩の場合

中国人日本語学習者は、親しい同輩の場合は5.7%あるが、親しくない同輩の場合は代案提示が1人もいなかった。これに対して、日本人大学生は親しくない同輩の場合4.3%で、中国人日本語学習者ほど極端ではなかった。中国人が親しくない相手に「不愛想である」と言われているが、そういう思考様式の影響が中国人日本語学習者にはやはり残っているとされる。

全体的に見れば、中国人日本語学習者は親しい目上に対して用心深く、丁寧で、積極的に代案を提示している。親しい同輩にも積極的に代案を提示している。一方、日本人は目上に対して親疎の差はそれほどないが、親しくない場合のほうが代案提示が低いことがわかった。中国人日本語学習者は日本人と付き合うとき、親しくない目上や同輩にも気配りが必要なのではないかと思う。

4.4 中国人日本語学習者と日本人の詫び表現

中国人日本語学習者と日本人のそれぞれの詫び表現の出現頻度の比較を表5にまとめてみた。

表5

断る人	中国人日本語学習者 35				日本人 258			
	目上		同輩		目上		同輩	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
すみません	11 31.0	19 54.3	13 37.1	17 48.6	107 41.5	113 43.8	1 0.3	12 4.6
ごめんなさい	0 0	0 0	0 0	0 0	62 24.0	31 12.0	4 1.5	38 14.7
ごめん(ね)	0 0	0 0	6 17.1	6 17.1	4 1.5	2 0.7	180 69.8	134 51.9
申し訳ないのですが (ごさいません)	4 11.4	8 22.8	1 2.8	0 0	34 13.2	64 24.8	4 1.5	4 1.5
悪いけど(ね)	0	0	0	0	0	0	12	13
悪い(です) けど	0	0	0	0	0	0	4.6	5.0

「すみません」は親しい目上に対して、中国人日本語学習者は31%、日

本人は41.5%を占め、日本人のほうが10ポイントほど高い。親しくない目上では、中国人日本語学習者は54.3%で、日本人の43.8%よりも11ポイント近く高い。一番大きな違いは、親しい同輩に対して、中国人日本語学習者は37.1%なのに対して、日本人はわずか0.3%しかない。また、親しくない同輩に中国人日本語学習者は48.6%で、日本人は4.6%にすぎない。この結果において、日本人は「すみません」という詫び表現は、同輩にあまり使わない傾向が見られる。

「ごめんなさい」は親疎に関係なく、目上にも同輩にも中国人日本語学習者は0%であるのに対して、日本人は親しい目上の場合、24%もあるが、親しくない目上の場合12%と半分減少している。また、親しくない同輩の場合14.7%あり、親しい同輩の場合の1.5%より13ポイント以上も多い。この結果から、中国人日本語学習者は「ごめんなさい」を避ける傾向にある。その原因は、「ごめんなさい」という表現をどのような場面で、どのような人に使ったらいいかはっきり分からないため、使うのを避ける傾向があるのではないかと推測できる。

「ごめん(ね)」は同輩に対しても、親疎とも同じように使われているが、目上に対して中国人日本語学習者は絶対に避けるという傾向が見られる。日本人も目上に避ける傾向があるが、親しい同輩に対しては約70%の人が使っている。調査では目上に使うのは20歳未満の日本人学生しかいなかった。また、親しくない同輩に対しても、51.9%と半数を超えた。「ごめん(ね)」という詫び表現は親しくない同輩にもよく使われるものであると分かる。

「申し訳ないのですが」は、日中共通なところが見られる。どちらも親しい目上より親しくない目上に使うことが多い。

「悪い(です)けど(ね)」という言い方は、目上に対しては見られないが、日本人のほうで、同輩には少し見られる。この結果から「悪い(で

す) けど」という言葉は、この場面では「詫び」の気持が弱いということが推測できる。「悪いけど」は、40歳以上の日本人は同輩にも使わない傾向があった。

全体的に見れば、「詫び」表現の使用について、日本人は中国日本語学習者より豊かである。つまり、中国日本語学習者は詫び表現の使い分けがよく分からないか、または、それぞれの表現を使うときや助詞「ね」や「けど」などの文末に使われる表現において、微妙な心理的な差異が分からないと考えられる。

4.5 中国日本語学習者と日本人との「直接的な断り」についての比較

「直接断り」の出現頻度が表1に示しているように、日本人は中国人日本語学習者よりずっと多い。中国日本語学習者の「直接断り」表現は「それはちょっと…」「土曜日はちょっと…」「ちょっと…」と遂行動詞を使わずに、中途終止文で終止しているのに対して、日本人は表現が豊かで、「貸せない(んです)」「貸すことができません(できません)」「ちょっと貸せないんです(ません)」「ちょっとできません(ないです)」「無理かもしれません」「無理です」「ちょっとお貸しすることができません」「たぶん無理(だめ)」「難しい」など多様である。また親しくない目上には「お…する」という謙譲表現が用いられることが多い。親しい目上より親しくない目上のほうに言葉遣いに気を使っている。親しくない同輩にも「です」「ます」体を使って、言葉遣いに気を配っている傾向がある。

5. おわりに

本調査から見ると、中国人非日本語学習者は「詫び先行型」より、「理由先行型」のほうがいられやすい傾向がある。疎に対して、目上か同輩かに関係なく、「詫び先行型」が多い。親しい目上には「結論先行型」と「直接的な断り」は見られない。これは中国人が上下関係より親疎関係を重視

する、特に親しい目上はかなり気配りをしている傾向があることを示している。同輩に対して、疎の場合、「結論先行型」と「直接的な断り」を用いやすい傾向がある。

日本人は目上、同輩、親疎に関係なく、「詫び先行型」が現れやすい。疎の場合、目上より同輩のほうに「詫び先行型」がやや多く見られ、目上より同輩のほうに気を配る傾向がある。「直接的な断り」を用いたのが半数ぐらいいることから、日本人は断るとき、はっきり相手に自分の意向を伝える傾向があることを示している。親しい同輩にも気軽に断る傾向も見られる。

中国人日本語学習者は、「詫び先行型」の使用が日本人とそれほど変わらない。中国人の「理由先行型」の思考様式の影響が少ない。「結論先行型」と「直接的な断り」は日本人より少ない。

「直接的な断り」表現は「それはちょっと…」と遂行動詞を使わない中途終止文だけである。断ることによって、当初予測していた相手に失礼になるという心配はないが、このような中途終止文を使うのが相手に対する配慮か、言語表現の不足か、両方とも考えられる。

代案提示について、中国人日本語学習者は親しい目上に丁寧で積極的に代案を提示しているが、親しくない同輩には代案提示が1人も見られない。日本人は目上、同輩、親疎にも大きな差はない。

従来、中国人はストレートに自分の意向を表すスタイルが多いと言われており、先行研究との違いが出た。今回の調査では、比較的礼儀を保ち、婉曲さを重視する傾向が見られた。

コミュニケーション・ギャップの視点から中国人日本語学習者と日本人の断り表現のパターンを見れば、もちろんギャップはあるが、先行研究ほど大きいものではない。人間の思考様式や価値観などは変わるもので、言葉も変わりつつある。また、中国人日本語学習者の断り表現の変

化は、コミュニケーションの教育を重視するようになってきた成果とも捉えることができる。

筆者が1998年ハルビンで行なわれた「中国中高校日本語教師研修会」に講師として参加したとき、中国人講師による模擬授業が行なわれたことがある。高校生を対象に、断り表現「それはちょっと……」に関する授業であった。中国人講師は、日本語の断り表現を理解させるために、生徒たちに、相手を傷つけないでどのように中国語で断るかを出させた。生徒たちは、実にいろいろな言い方で表現していた。ここで忘れてはならないのは、日本語社会の持つフレームを中国語社会にあてはめ、違いばかりに目を向けることである。断りにおけるポライトネスは、日中共通した部分も大きい。今回の調査でもそれが証明されたとも言える。日本語を習得していく上でも、共通している部分を教学にいかしていくことも必要である。

今後、国際交流が深まり、日本語教育の中で、日本語にある文化的背景、日本人の思考様式、価値観などが重視されることによって、日中両国語のコミュニケーション・ギャップも小さくなっていき、誤解も、ミスコミュニケーションも少なくなり、円滑的にコミュニケーションをするのはまったく不可能なこととは言えない。

今回の調査では、不足点がいくつかある。調査対象者の人数が日中で対等ではなく、中国の南(湖南省湘潭市)に限定されていたこと、また、場面設定が単純であり、「目上」、「親」、「疎」の категорияがはっきり限定されていないことなどである。このことは、今後の研究の課題としたい。

最後に、アンケート調査に協力していただいた方々に心から感謝の意を申し上げたい。

【参考文献】

1. 劉玉琴・小野由美子(1996)「中日母語話者の『断り』発話行為に見られる相違について」『教育学研究紀要』第42巻 第2部 中国四国教育学会
2. 志村明彦(1995)『断り』という発話行為における待遇表現としての省略の頻度・機能・構造に関する中間言語語用論研究』『慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No.15 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
3. 馬場俊臣・禹永愛(1994)「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学紀要 (第1部A)』第45巻 第1号 北海道教育大学
4. 劉玉琴・小野由美子(1998)「異文化間のミスコミュニケーションに関する一考察—日・中母語話者の断り表現をめぐって—」『鳴門教育大学研究紀要 教育科学編』鳴門教育大学
5. 熊井浩子(1992)「外国人の待遇行動の分析(2)—断りを中心にして—」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学部』第28巻第2号 静岡大学教養部
6. 生駒知子・志村明彦(1993)「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー :『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号 日本語教育学会
7. 横山杉子(1993)「日本語における『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較 —社会言語学のレベルでのフォリナートーク—」『日本語教育』81号 日本語教育学会
8. カノックワン・ラオハブラナキット(1995)「日本語における『断り』—日本語教科書と実際の会話との比較—」『日本語教育』87号 日本語教育学会
9. 藤森弘子(1995)「日本語学習者にみられる『弁明』意味公式の形式

- と使用 —中国人・韓国人学習者の場合— 『日本語教育』87号 日本語教育学会
10. 鮫島重喜(1998)「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程 —中国話話者の『依頼』『謝罪』の場合—」『日本語教育』98号 日本語教育学会
 11. 山口加代(1997)「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因 —中国人及び台湾人留学生を対象として—」『日本語教育』93号 日本語教育学会
 12. 山口加代(1997)「留学生の発話行為と文化的要因に関する一考察 —中国人及び台湾人留学生を対象として—」『異文化間教育Ⅱ』第11号 異文化間教育学会紀要編集委員会
 13. 熊井浩子(1992)「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』12号 明治書院
 14. カノックワン・ラオハブラナキット(1997)「日本語学習者にみられる『断り』の表現 —日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』第7巻 国際交流基金日本語国際センターⅡ編
 15. 森山卓郎(1990)「断りの方略 —対人関係調整とコミュニケーション」『言語』Vol.19 No.8 大修館書店
 16. 永瀬次郎(1992)「外国語によるコミュニケーション」『日本語学』12号 明治書院
 17. 東山安子(1992)「異文化間における非言語コードと価値観のコード」『日本語学』12号 明治書院
 18. 高田誠(1992)「コミュニケーションの対照研究」『日本語学』12号 明治書院
 19. 杉戸清樹他(1992)「『誤解』のメカニズムの記述をめざして」『日本

語学』12号 明治書院

20. 石山茂利夫(2000. 4) 『『全然大丈夫』はいつから?』『月刊日本語』アルク
21. 堀井恵子(2000) 「異文化理解と心理」『月刊日本語』アルク
22. 金田一春彦(2002) 「日本語を反省してみませんか」 角川 one テーマ21
23. 水谷修(1987) 「話しことばと日本人 —日本語の生態—」 創拓社
24. J・V・ネウストプニー(2000) 「今日と明日の日本語教育 —21世紀のあけぼのに—」 アルク